様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３５３０５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００１６

研究課題名（和文）14世紀ヨーロッパのキリスト教霊性に見られる「近代的自我」の形成への萌芽

研究課題名（英文）The beginning of the developmentof "modern ego" in the Christian spirituality of the 14th century Europe

研究代表者
須沢　かおり（SUZAWA, KAORI）

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：５０１７１１９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：１４世紀末のキリスト教霊性の中に近代的自我の形成の端緒があることを、文献学的研究を中心に明らかにした。中世末期の霊性は、内面化、実存化の傾向が強まり、内的、個人的に知覚される経験が重視されている。ドイツ・ライン地方の霊性、フランドルの霊性、さらにスペインの神秘主義のなかに、中世から近代への移行と、近代的自意識の形成を見ることができた。さらに、近代の個人的な信心と宗教体験の内面化において重要な役割を果たす、聖母出現と聖母信心について、中世と近代の文献を調べ、その連続性と相違を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research deals with the beginning of the development of a modern ego seen in the Christian spirituality at the end of the 14th century. In the late Middle Ages spirituality, the tendency of internalization and existentialism have been emphasized. In the transition from late 14th century to modern period a personal experience has been given more existentially and personally. In the spirituality of the Rhine region of Germany, Flemish spirituality and Spanish mysticism, we meet the transition from the Middle ages to the modern period and its development of modern self-consciousness (ego). In addition, we examined the texts on the apparitions of Mary and the devotion to Our Lady, which play an important role in the development of the modern ego.

研究分野：宗教哲学、キリスト教霊性、神秘思想、キリスト教思想史、宗教思想

キーワード：キリスト教霊性　近代的自我の形成　中世と近代のあいだ　宗教生活の個人化、実存化　中世と近代の連続性　聖母マリアへの信心の影響　聖母マリアの出現　ヨーロッパのキリスト教霊性の根幹

1. 研究開始当初の背景

本研究の意図は、デカルト、ロックに見られる理性的な主体、行為や思考の主体としての近代的な自我の概念において明確化されていない点に焦点をあて、「近代的自我」についての思想の意味と限界を問い、その思想史的前提にまで遡って理解しようとすることにある。デカルト的な理性的主体としての自我は人間の身体、心的作用から距離を取り、自我が「点的自我」(ロック)に到達するが、個々の人間の日常の生の営みにおける生き方、精神生活、自己探究における近代的アイデンティティは「近代的自我」のもつ重要な側面である。本研究は近代的自我の源泉をより明確にする目的のために、これまでの思想史において顧みられることの少なかった個人の生き方における宗教的精神的次元、神の前に立つ人間、キリスト教的人間実存、日常生活における自己探究のありかたを中世末期の霊性と思想のうちに探り、「近代的自我」の萌芽、端緒を１４世紀ヨーロッパの宗教家、神秘思想家の著作から文献学的に明らかにする。

2.研究の目的

中世と近代を分断し、現代と近代を近現代として連続的に捉えていた従来の一般的な思想史的理解を再検討し、１４世紀ヨーロッパのキリスト教霊性に「近代的自我」の端緒を探ることが本研究の目的である。本研究の三つの視角は、①個人的な宗教的コミットメントとしての〈私−自我の源泉としての霊性〉、②〈宗教・神秘思想〉、③危機と転換の時代に普遍的知識や自己実現の新たな規範を求める精神活動が一挙に花開く〈１４世紀ヨーロッパの思想潮流〉である。１４世紀のドイツ、フランドル、スペインのキリスト教思想家の著作においてどのような点に近代的自我の形成の萌芽が見られるか明らかにし、中世と近代を連続と対立という双方の視点で捉え直し、中世と近代の「あいだ」を問い、「近代的自我」形成のルーツを解明することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は中世から近代への転換期にあった１４世紀ヨーロッパのキリスト教霊性の著作のなかに、近代的自我への形成の萌芽を探究した。本研究の問題設定は「中世」と「近代」のあいだとしての「１４世紀」に、近代思想の発展の根本的動機を見いだすことにある。これは中世と近代を乖離したものとして捉える従来の思想史的区分に文献研究を通してメスを入れ、新たな思想史的見方を提示するものである。研究文献の精査、解読は本研究のベースとなる。対象となる文献資料は現代語への翻訳も少ないため、海外共同研究者の協力を得て文献解読を進めた。

本研究は研究期間の３年間を通して、文献研究と国際共同研究の２つの部分から構成されている。

（1）１４世紀ヨーロッパのキリスト教霊性関係の文献研究：

１４世紀の歴史的状況を把握する基礎的研究

まず文献研究に入るための予備的研究として１４世紀の歴史的、社会的、文化的状況について把握する。経済危機、人口の減少、市民階級の勃興、封建体制の動揺、ペストの流行、教会と教皇の権力の弱体化という危機と転換の時代にあって、人々は神との個人的な魂の旅に誘われ、経験に裏づけられた合理的自我を探求するようになった背景を明らかにする。この基礎的・予備的ために１４世紀の歴史的状況について論じている文献、資料の収集と分析を行なった。

(2) 中世末期、１４世紀の霊性に関する文献の解読と「近代的自我」の形成の萌芽となる主題、動機の分析、検討

本研究の対象とした著作家、著作は下記のとおりである。

① 中世末期にヨーロッパで広く読まれ、多大な影響をもたらした、

ザクセンのルドルフスの『キリストの生涯』(Vita Christi)：この著作には、神と対話し、神に祈る個としての人間が想像力と感情移入をもって聖書を読み、黙想するという、実存的で、個人的な新しい霊性が紹介されている。従来の聖書の読み方とは異なる個人的で人格的な聖書の読み方と祈りが、近代的自我の形成の糸口となる点を明らかにした。ルドルフスの『キリストの生涯』はラテン語で書かれており、その随所に聖書の解説が織り込まれているため、聖書学の専門家である海外共同研究者のノイデッカー教授から専門的知識の提供を受けた。

②　１４−１５世紀のキリスト教霊性に新しい風を吹き込んだ「新しい敬虔」（ディヴォティオ・モデルナ）運動に見られる宗教的心性の変化について調べた。特にトマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』(Imitatio Christi)に見られるキリストの人間性に対する崇敬と、個人的、情緒的、内面的、日常的な傾向が「近代的自我」の先駆けとなっている点をテクストに即して解明した。この書物も聖書についての黙想、祈りが多く盛り込まれているため、海外共同研究者のノイデッカー教授の研究協力を受けた。

【H.27、２８年度】

（１）．<u>１４−１５世紀ヨーロッパのキリスト教霊性関係の文献研究</u>

①イエズス会の創立者で、近代キリスト教霊性の先駆けをもたらした、イグナティウス・デ・ロヨラの著作の分析・解読をする。イグナティウスの作品のなかで『霊操』と『自叙伝』を研究対象とした。イグナティウスの『霊操』は一般の人々がたやすく読める修徳書であったため、神の前における個人の敬虔な生き方を求める人々に多大なインパクトをもたらした。『霊操』に見られる近代的自我への発露と、近代的な宗教意識の覚醒について論究する。イグナティウスは近代への橋渡しとなる思想家、宗教家であるため、海外共同研究者であるドイツ、ミュンスター大学のミュラー教授とも意見交換、討議を進めた。

③カルメル会のアビラのテレサの著作の分析・解読をする。アビラのテレサの『霊魂の城』と『完徳への道』を研究対象とした。テレサの著作に見られる信仰生活の内面性、情緒性、実存的傾向が、近代的な自我の形成へと結びついているか論究した。テレサの著作は翻訳もあるが、原典はスペイン語であるため、イタリア、グレゴリアナ大学で霊性学を専攻するガルシア・ミゲル教授から専門的知識の提供を受けた。カルメル会の霊性の近代的、現代的な面を解明するために、エディット・シュタインとアビラのテレサ、十字架のヨハネとの関わりについても研究した。

(2)中世から近代にかけての聖母マリアへの信心と霊性についての調査

文献研究としては、クレルヴォーのベルナルド、アンセルムス、ドン・スコトス、トマス・アクイナス、さらに聖母出現に出会った、ベルナデッタ・スピルーの著作に当たった。聖母出現からカトリックの一大巡礼地として発展を遂げたルルドでの調査を行なった。ルルドでは巡礼者への聞き取り調査を行い、聖母マリアへの信心と霊性がどのように進展したかを明らかにした。

４．研究成果

１４世紀末のキリスト教霊性の中に近代的自我の形成の端緒があることを、文献学的研究を中心に明らかにした。中世末期の霊性は、内面化、実存化の傾向が強まり、内的、個人的に知覚される経験が重視されている。ドイツ・ライン地方の霊性、フランドルの霊性、さらにスペインの神秘主義のなかに、中世から近代への移行と、近代的自意識の形成を見ることができた。さらに、近代の個人的な信心と宗教体験の内面化において重要な役割を果たす、聖母出現と聖

母信心について、中世と近代の文献を調べ、その連続性と相違を明らかにした。

(1)１４−１５世紀のカルメル会の霊性に見られる近代的自我の端緒を明らかにするために、アビラのテレサと十字架のヨハネ、さらに現代のカルメル会神秘家、三位一体のエリザベトについての文献学的な研究を進めた。自己の内面に向かい、そこで神に出会い、神を経験する霊性は、作品からは自由で、近代的な自我への端緒と発展が見られることがわかった。この点については、いくつかの論文で明らかにした。

(2)中世末期の霊性として、ドイツ、ライン地方の霊性、特にザクセンのルドルフについて研究した。彼の主要な作品である Vita Christi における聖書の読み方、黙想の方法は、個人的で実存的な自我の端緒が表れており、近代のさきがけとなったことがわかった。

(3)中世から近代にかけてのキリスト教霊性史に置いて重要なテーマである聖母出現とその受容、展開について調べた。この目的のために、フランスの聖母出現の巡礼地で調査を行い、ルルドでは聞き取り調査、視察を行った。聖母マリアへの信心は、個人の信仰の深化に大きなインパクトを与え、中世から近代にかけてのカトリックの霊性の中心になっていることがわかった。

(4)中世から近代に入り、個の確立と信仰の実存化、個人化、情緒化を探求する霊性が台頭したことは、近代的な自我の形成のための端緒となっていることが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12　件）
① 須沢かおり、ルルド研究序説 II、『キリスト教文化研究所年報』（ノートルダム清心女子大学）、査読有,38, 2016, 1-48.
② 須沢かおり、いつくしみの秘義を生きる、『カルメル―今日の霊性』, 査読有,361,2016,16-23.
③ 須沢かおり、ルルド研究序説 I、『キリスト教文化研究所年報』（ノートルダム清心女子大学）、査読有,37, 2015, 1-27.
④ 須沢かおり、エディット・シュタインとアビラのテレサが目ざしたもの、『カルメル―今日の霊性』, 査読有,357,2015,16-22.
⑤ 須沢かおり、エディット・シュタインの著作に見るアビラの聖テレサ、『カルメル―今日の霊性』, 査読有,359,2015,9-15.

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　3　件）
① Reinhard Neudecker, Gregorian & Biblical Press, Rabbinic Literature – A Rich Source for the Interpretation and Implementation of the Old and New Testaments, 2016, 256.
② Kaori Suzawa (Beate Beckmann & Hanna-Barbara Gerl-Falkovitz),Text & Dialog, Edith Stein-Themen, Kontexte, Materialien, 2015, 318.
③ 須沢かおり、知泉書館、『エディット・シュタインの道程−真理への献身』、2014,345.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
須沢　かおり（　Suzawa, Kaori　）
ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：50171195

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3) 連携研究者

研究者番号：

(4) 研究協力者

アンドレアス・ウヴェ・ミュラ（Andreas Uwe Müller）ミュンスター大学・神学部・教授

ラインハルト・ノイデッカー(reinhard Neudecker)教皇庁立聖書研究所・聖書学部・教授

(　　)